

ジョージア(グルジア) 便り その62 トビリシはおしゃれタウン?

文 高野陽年 text by Yonen Takano

ジョージアの魅力は大自然にある。

それは言うまでもないだろう。連なる山々、美しい清流、人為的に整備されているとは言え見渡す限り広がるワインヤードも壮観だ。牧歌的で原始的な生活が垣間見られるという反面、田舎で不便というイメージも払拭できない。たしかに首都トビリシを一步でも出ようものなら羊の群れが道路を塞ぐ。どこまでも続く丘陵、広がるワインヤード、照り付ける強い日差しは、東京にいてはどこか見下すような、あるいは夢に見るような原風景かもしれない。

トビリシは意外にも人口100万人を超え、ヨーロッパの中堅都市よりも大きい。そしていまでは一概に田舎だと言いつつこともできないような活気を持っている。

トビリシは、ペレストロイカの後の度重なる内戦とソ連という枠組みを失ったことによる経済的貧窮が社会問題であった。周辺国のアゼルバイジャンなどは天然資源に活路を見出したが、ジョージアにそれはなく、失われた時間を通してきた。街の整備は遅れ、崩れかけの家や利用価値を無くし、廃墟と化す建物も多かった。

それが近年になってやっと、かつて帝政時代にコーカサス地方の国際拠点

都市、ソ連時代にモスクワ、レニングレードに次ぐ重要都市として発展してきた活気が戻りつつある。その中心はソ連時代をあまり知らない若い世代である。ソ連の封建制の思想から影響を受けず、宗教的価値観に固執しない新しい世代だ。その一部は高等教育を海外で受け、そこで培った新たな価値観やトレンドというものを自国に持ち帰り実践している連中だ。人件費がかなり安く、社会の中で本来培われるべきであったベテラン層が失われた時間のせいで空白になっていることも、若い世代を後押ししている。

例えばおしゃれなホテル、カフェなどは東京にはかなわないものの、もはや日本の地方都市よりも多く、そしてよりスタイリッシュである。崩れかけの建物もどこか古臭い家具も彼らの手にかかれば、ソ連ノスタルジーという新たなファッションのトレンドに生まれ変わる。もちろんそのすべてが成功する訳ではなく、新たな場所ができては潰れ、そのサイクルはかなり早い。スタートアップ資金が低く、法整備が間に合っていないからこそ、多くの若者が実際に事業を推進するのだ。これからも

先日新たな通りが整備され、かつて

輝きを誇った150年前の様相に戻ったという。その開通式で踊る機会があったのだが、本番の2日前に通った際はまだまだ工事中といった様子であった。式ではかなり美しい通りに変貌したように見えたが、その一週間後には道路に亀裂やほころびが目立つさまであった。

これも新生トビリシの若い勢いである。トビリシがまたにぎわった街として認識されるまでの道のりである。

幾多の失敗を乗り越え、新しい時代の都市トビリシへと変わっていくのである。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

